

国際交流は次のステップに

日本病院薬剤師会理事
旭川医科大学病院薬剤部
田崎 嘉一 Yoshikazu TASAKI



これまで病院薬剤師の国際交流発展を祈念して、この巻頭言に執筆してきた。最初に「病院薬剤師による国際交流の意義」（令和元年12月）と題し、国際交流を通じて得た経験や知識が、現状打破につながるアイデアの創出の可能性を述べた。その後、コロナ禍となり多くの国際交流活動が中止せざるを得ないなか、まさに禍い転じて急速にWEB会議やWEB開催の学会が増えて国際交流の形も同様に変わっていった。その頃に、「今、改めて国際交流の意義を問う」（令和4年2月）として、形が変わってもその意義は得られると書いてきた。ここ数年を振り返ってみるとコロナ禍の影響をまともに受けて国際交流活動は縮小せざるを得ない状況であったが、ようやく昨年5月から新型コロナウイルス感染症が5類移行し、少しずつ元に戻ってきている。ご存じのようにすでに海外では日本よりも早くマスク着用のない現地開催の学会が始まっていた。

それに伴って、日本病院薬剤師会（以下、日病薬）の国際交流委員会活動も復活してきた。昨年8月には、久しぶりに国際協力機構（JICA）による海外の薬剤師や薬事関係の外国人を集めた日本の医療を学ぶ研修が対面で開催され、私達は国立国際医療研究センター病院や千葉大学医学部附属病院の力も借りて日本の病院薬剤師の活動を紹介した。そして、日病薬としては初めてとなるインドネシア病院薬剤師会の会長と30人ほどの病院薬剤師と交流する機会を武田会長の了解を得て昨年10月に実施できた。この時には病院薬剤部見学として東京大学医学部附属病院、虎の門病院、がん研有明病院、そして京都、神戸、大阪の国立大学医学部附属病院の6病院の薬剤部の多大な協力の下、実施することができた。また両国の病院薬剤師会で初めて会合も行うことができ、お互いの業務の状況を知ることができた。この場を借りて各関係の皆様にお礼を申し上げると同時に、このようなイベントを陰から支えてくれた事務局の和泉専務理事、松久事務局長にも感謝申し上げたい。このような国際交流のイベントの企画・実施には、様々な調整や不確定要素が常に付きまとい、コミュニケーション能力や調整能力が試される。これは昨今、医療にも必要とされる認知能力や対人能力といったノンテクニカルスキルやマネジメント能力の向上につながっていくのではないかと感じている。

国際交流は、もちろんお互いを知ることが第一ではあるが、病院薬剤師にも必要な様々なスキルが磨かれるのではないだろうかと思うようになった。今年の国際薬剤師・薬学連合（FIP）は、南アフリカのケープタウンで9月に開催される。日病薬もJapan Nightという世界の薬剤師との交流の場を主催することとなっているので、是非これを読んだ薬剤師の学会参加を期待したい。